

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

大村純忠

大村純忠は、天文2（1533）年に生まれ、天正15（87）年に没した、肥前国の戦国大名です。永禄6（63）年に、日本初のキリシタン大名となったことでも知られます。また、肥前の長崎は元来、小さな村だったものを、純忠によって元龜2（71）年に町建てがなされ、港が開かれたとされています。しかしながら、近年の研究では、純忠による開港以前の様子が分かっています。

文禄期（16世紀末）、豊後臼杵の唐人町に居住した中国人陳元明の末裔に伝わる系図に、同氏の3代前の陳季長が一族と共に中国江蘇省の揚州から船

に乗り、永正3（06）年に肥前の森崎、現在の長崎市江戸町に着岸して日本に定住したとの記録があります。肥前国内にしばらく滞在した陳一族やがて、その5人の子どもの代に肥前・肥後・筑後・豊後に分住するようになりました。

そのうちの陳寛明が、永正12（15）年に豊後府内（大分市）に移住して仏師としてなりわいを立て、以後、義明から元明へと家業をつないだとされます。元明は、方広寺の大仏漆喰の技術奉公の恩賞として、豊臣秀吉から褒美の朱印状を与えられています。このようにその祖先一族の記事から、16世紀初頭の長

崎に、ある程度の港機能が存在していたことが推測されます。

純忠によって16世紀後半に町建てされたのは、大村・平戸・島原・外浦・分知・横瀬浦の6町でした。場所は、現在の長崎市中心部の万才町一帯。寛永年間（17世紀前半）の記録によると、ここには国内他所からの移住者や外国人、そしてキリシタンが多く居住していました。陳一族の上陸地森崎も、これらの町屋が立つ陸地が長崎港に突き出た岬の先端、旧長崎県庁付近です。

港湾都市長崎の発掘調査で注目できるのは、大村町の状況です。同町跡からは、文献史料に記録される慶長6（1601）年の火災の焼土層が検出され、その前後の美観が明らかになっています。遺構では、蔵と思われる礎石建物や、住居と思われる掘立柱建物のほか、井戸・石組み排水溝・獣骨・陶磁器な

どが確認されました。

特に獣骨は、刃物による切断痕が残されている牛骨が多く、居住した西洋人による食用解体



「南蛮船来航の波止場跡」の碑が立つ長崎の森崎付近

長崎を発展させた戦国大名

をつかがわせます。また、陶磁器では、中国産陶磁の割合が9割を超えており、その状況は17世紀前半まで続いています。
（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）